

Costume and Textile

No. 49

服飾文化学会会報

2025年3月

2025（令和7）年度 第26回服飾文化学会 大会のお知らせ

2025（令和7）年度服飾文化学会第26回大会を下記の通り開催いたします。多くの皆様にご参加くださるようにご案内申し上げます。

記

開催日：2025年5月17日（土）・18日（日）

開催校：共立女子大学

〒101-8437 東京都千代田区一ツ橋

2-2-1

【研究発表】2号館802教室

【作品発表】2号館803教室

【自由見学】共立女子大学博物館 2号館B1

1. 大会プログラム

5月17日（土）

13：00～14：50 研究発表

15：00～16：30 特別講演

演題「着物コレクター野村正治郎の活動と人物像」

講師 澤田 和人氏 国立歴史民俗博物館 准教授

16：30～17：00 総会

17：10～18：30 情報交換会

（2号館2階カフェ「ラシュレ」）

5月18日（日）

9：30～11：55 研究発表

11：55～12：55 昼食

12：55～15：45 作品展示・ポスター展示

ショートスピーチ・質疑応答

＊作品・ポスター展示期間は5月17日（土）13：00～5月18日（日）15：45です。また、ショートスピーチは研究発表会場（802教室）で行います。

＊共立女子大学博物館は17日（土）・18日（日）10：00～16：00に開館いたします。

＊発表件数により、時間変更が生じますので、後日送

付しますプログラムでご確認をお願いいたします。

2. 参加申込・参加費

（1）参加申込・参加申込締切日 2025年4月20日（日）
第26回大会ご案内メール、学会ホームページに記載されたGoogleフォームでお申し込みください。

（2）参加費

大会参加費	会員	3,000円
	非会員	4,000円
	学生会員	1,000円
	学生非会員	1,500円
情報交換会費	会員	4,000円
	非会員	4,500円
	学生会員	2,000円
	学生非会員	2,500円

（3）振込先・振込締切日 2025年4月30日（水）

みずほ銀行

《店名》705 宇都宮支店

《振込口座》普通 口座番号：4927988

《加入者名》古川 咲（フルカワ サキ）

＊振込手数料が発生する場合はご負担ください。

＊口座名義が申込者と異なる場合は、振込人名を申込者名に変更してお振込みください。

3. 発表申込

（1）発表申込締切 2025年3月31日（月）

①既に送信致しました第26回大会ご案内メールの「ポスター・作品展示発表者へのお知らせ」をご確認の上Googleフォームでお申し込み下さい。

②発表形式には、口頭発表・作品発表・ポスター発表の3種があります。

③発表は未発表の研究報告で、本学会会員に限られ

ます（共同研究の場合は共同研究者も同様）。非
会員で発表希望の場合は学会ホームページから入
会手続きをお願いいたします。

(2) 要旨原稿締め切り 2024年4月20日（日）

提出先：sfurukawa@kyoritsu-wu.ac.jp

- ①要旨 A4 縦置き、横書き、1枚
- ②余白 上25mm、下30mm、左右30mm
- ③文字 10.5ポイント、明朝体

4. 特別講演

◆講師 澤田和人氏

国立歴史民俗博物館 准教授

◆演題「着物コレクター野村正治郎の活動と人物像」

◆講演内容

野村正治郎は、近世の着物のコレクターとして夙に
知られてきました。しかし、その知名度の高さに反し
て、彼の活動の実態については意外なほどに詳らかに
なっていません。この講演では二つの側面から正治郎
の活動を検証し、その人物像に迫ります。

一つ目は、外国・外国人に向けての活動です。正治
郎は、元来、日本の染織品を主力商品とする京都の美
術商であり、活躍した時期には欧米でジャポニスムが
最盛期を迎えていました。外国・外国人を相手に、正
治郎がいかなる販売戦略をとったかをまずは見ていき
ます。次に二つ目は、国内に向けての活動です。日本
の産業振興や風俗研究等のために、正治郎が果たした
役割について見ていきます。以上のような二つの側面
から、正治郎が生涯をかけて着物の美と重要性を国内
外に発信していったその足跡を辿っていきます。

◆講師プロフィール

大阪大学大学院文学研究科修了。1998年人大和文華
館学芸員、2002年国立歴史民俗博物館助手を経て、
2009年より現職。中世から近代の日本の染織史・服飾
史を専門とする。著作には、『REKIHAKU ファッ
ション×博物館』（国立歴史民俗博物館、2021年）、
『野村コレクション 服飾Ⅰ』（国立歴史民俗博物館、
2013年）、『野村コレクション 服飾Ⅱ』（国立歴史民
俗博物館、2014年）、「近代の着物一生地と技法」（東
京国立博物館・朝日新聞社編『特別展きもの』朝日新
聞社・テレビ朝日、2020年）など。

5. 自由見学

✳共立女子大学博物館

✳展示テーマ 企画展「絵画×ファッションー春にめ
ぐる装いの世界ー」

✳展示日時 5月17日（土）18日（日）
10：00～16：00

6. アクセス

✳最寄り駅

・神保町駅A8 出口 徒歩1分

東京メトロ半蔵門線・都営地下鉄三田線・新宿線

・竹橋駅 b1出口 徒歩5分

東京メトロ東西線

✳地図



7. 連絡先

服飾文化学会 第26回大会・総会実行委員会

共立女子大学

宮武恵子 kmiyatake@kyoritsu-wu.ac.jp

田中淑江 yostanaka@kyoristu-wu-ac.jp

古川 咲 sfurukawa@kyoristu-wu.ac.jp

世田谷区立郷土資料館美術史講座講演 日本の着物（1）
「明治時代の美術染織にみる孔雀の図案の変遷」（令和6年9月21日実施）の報告

中川 麻子（大妻女子大学）

「美術染織」とは明治～大正時代にかけて日本で制作された、絵画的図案を高度な染色技法（刺繍、織、染）で表現した観賞用の染織作品である。明治20～30年代（1880～1900年代頃）に最盛期を迎え、海外万博や日本国内で高く評価された。美術染織の図案には花鳥、動物、風景、人物などがあったが、そのうち鳥類、とりわけ孔雀は、超絶技巧を披露できるモチーフとして好まれ、美術染織の初期にあたる明治10年代頃（1877～1897年頃）から使用されていた。初期は絵画の孔雀図を忠実に再現したものだったが、明治30年代頃（1897～1910年頃）には構図やモチーフが変化し、豪華な図案の壁掛等が多数制作された。

これまで美術染織のモチーフの変化については「海外客の需要に応じて図案が変化した」といわれてきた。しかし美術染織作品は画家が描いた絵画を下絵にしていることから、当時の日本の絵画分野に起きた変化の影響も無視できない。そこで本講演会では、明治時代の美術染織作品と同時期に描かれた絵画の比較を通じて、孔雀図案の変化の経緯を追うことをテーマとした。

孔雀の意匠は、日本には奈良時代に中国から持ち込まれ瑞鳥の意匠として崇められた。特に孔雀と牡丹・白木蓮・海棠の組み合わせは吉祥の意匠として好まれた。孔雀は鳳凰と並ぶ吉祥の象徴であり、宮中慶事に孔雀の意匠が使われた。孔雀図（絵画）のモチーフとしては、室町時代に狩野派によって孔雀・松・岩・牡丹の組み合わせが定型化した。江戸時代中期には来日した画家・沈南蘋の影響から写実的な孔雀図が人気となり、南蘋派に受け継がれた。また狩野派、南蘋派、中国の絵画などを学んだ円山応挙が、写実的かつ濃厚な色彩の孔雀図を描き人気となった。江戸時代後期には、南蘋や派円山派などの影響を受けた画家が、孔雀・多種類の花・小禽類を濃厚な色彩で描くようになった。

明治時代になると、西欧的な美術感覚が取り入れられ、遠近法を用いた背景につがいの孔雀と桜を含む多種類の花を組み合わせた新しい孔雀図が描かれるように変化した。明治20年代に御下命品として上納された

杉谷雪樵「花鳥之図」（明治22年）、滝和亭「孔雀鸚鵡図」（明治29年）も、こうした新しい構図と洋画技法が加わったダイナミックな孔雀図であった。

一方、美術染織は明治26年頃から30年代前半にかけて最盛期を迎えた。しかし明治33（1900）年パリ万博以降、大型で観賞用の作品が減少し、室内装飾への応用や小型・実用的な作品形式に変化した。例えば美術染織制作の主力業者であった飯田新七（現在の高島屋）による当時の商品アルバムには「孔雀と桜」の屏風や壁掛の画像が多数残されている。また現存品から、明治30年代（1900年代前半）には、孔雀・桜・藤の花・躑躅・白蓮などの「孔雀と百花」図案の輸出用の刺繍壁掛が多数制作されたこともわかっている。

これらの図案は、明治20年代に日本の美術分野で描かれた新しい孔雀図をベースにして、さらに染織品に適したアレンジ（余白を減らす、花を拡大するなど）が加えられたものと考えられる。美術染織は「美術としての染織品」を標榜し、画家が描いた絵画を染織品に適するように専用の下絵に直して使用していた。そのため当時の新しい絵画の構図や感覚が染織に持ち込まれたのは自然な流れであったといえる。

明治30年代以降、新しい孔雀図案の美術染織作品は輸出されるだけでなく文化政策の一環として海外への贈答品にも使用された。これにより日本の伝統的な孔雀図には少なかった「孔雀と桜」と「孔雀を中心とした百花百鳥図」の組み合わせが、新たな日本を想起させる意匠として国内のみならず海外にも広まった。これがアレンジされ、明治30年代以降制作の輸出用壁掛の豪華な「孔雀と桜」「孔雀と藤の花」の図案につながったと考えられる。

美術染織の図案は、単に海外客の嗜好に合わせて変化したのではなく、当時の美術分野の動向と密接に連動していた。絵画に描かれた孔雀の意匠は、美術染織という媒体を得ることで新たな表現へ変化した。これは「美術としての染織品」という特殊な性格を持つ美術染織だからこそ起きた現象だといえる。

2024 (令和6) 年度 研究例会の報告

2024年度研究例会は、女子美アートミュージアムで行われた「女子美染織コレクション展Part12 ヨーロッパの染織／Weaving Aesthetics 文様が織りなす美」(会期：2024年11月14日～12月27日)とのタイアップで、12月14日(土)に対面とオンラインのハイブリッド形式にて開催されました。「西洋絵画にみる服飾とテキスタイル—華麗なる宮廷衣裳を彩る植物紋—」と題した日本女子大学 内村理奈先生による講演は、学会員と非学会員を合わせて対面58名、オンライン31名の参加がありました。講演の内容は次の通りです。

(研究例会担当 高須奈都子)

[研究例会講演内容]

「西洋絵画にみる服飾とテキスタイル—華麗なる宮廷衣裳を彩る植物紋—」

内村理奈

この度、女子美アートミュージアムの展覧会に合わせて、服飾文化学会との共催企画として本講演についてご依頼いただき、西洋染織について考察する機会をいただきましたことを大変ありがたく思っています。講演準備にあたって、女子美アートミュージアムはじめ、東京家政大学博物館や、京都服飾文化研究財団でも事前に熟覧の機会をいただいたことにまずお礼を申し上げます。また、大妻女子大の須藤良子先生、杉野服飾大学の菅野ももこ先生には、作品の情報について多くのことをご教示いただきました。また、講演ではあまり触れることができなかったのですが、展覧会会場には、大妻女子大が長年制作されてきた西洋の時代衣装の素晴らしいレプリカも展示されており、今回は、染織実物遺品、立体のレプリカ作品、そして、私の講演内で西洋絵画との関係についてお話しをしましたので、多面的に西洋染織について考える機会になったのでは、と思っております。

講演では展覧会にあわせて、15世紀頃から19世紀の西洋のテキスタイルについて、絵画を参照しながら、こうしたテキスタイルの文様がこういった背景をもって生まれてきたのか、お話をしました。女子美コレクションは中世、ルネサンス期の染織から19世紀にまで至る大変貴重なコレクションを形成しています。

テキスタイルは、古くから衣装だけではなく、室内装飾にも用いられました。家具・調度品に貼りつけられたり、壁布として用いられたり、天蓋や垂れ布など、様々に用いられました。また今回テーマにした植物紋も非常に古くからありました。講演では、ルネサンスから19世紀初頭にかけての、西洋染織のもっとも華やかな時期を取りあげました。

今回、植物文について、次の3つに分けてみました。①意味をもつ植物紋、②幻想の植物紋、③写実的な植物紋、の3種です。講演内容の流れは、次の通りです。1. 意味をもつ植物紋：ルネサンスのザクロ紋、2. 幻想の植物紋、写実の植物紋：18世紀ロココの軽やかな花柄(更紗と絹織物)、3. 写実の植物紋から様式化へ：19世紀初頭、ナポレオンの帝政様式の植物紋、の順です。なかでも、2の18世紀の話に焦点をあて、当時の花模様をデザインしたデザイナーと、当時の植物図譜や植物画など、絵画との関係についてお話ししました。本稿では1と2について述べます。



1. 意味をもつ植物文(ルネサンスのザクロ紋)

文様としてのザクロ紋は非常に古くから幅広く見受けられ、東方の影響が色濃くみられます。そこには宗教上の意味や女性の美しさや子孫繁栄の意味など、吉祥紋といってよいほどの良い意味が付与されてきました。そうした意味は聖書などを参照するとよくわかります。絵画としては、初期ルネサンスのフィレンツェ出身の画家ピエロ・デル・ボッライオーロの作品「女性の肖像」(1480年頃、メトロポリタン美術館所蔵)や北方ルネサンスの画家ハンス・メムリンクの1480年の作品「アレクサンドリアの聖カタリナとバルバラと

ともにいる聖母子像」(メトロポリタン美術館所蔵)などを例としてあげて、当時の紋ビロードに描かれたザクロ紋を、女子美コレクションの実物作品とともに解説しました。女子美コレクションには15世紀のものと推定されている非常に貴重な絹の紋ビロードがあります。

2. 幻想の植物文、写実の植物文(18世紀ロココの軽やかな花柄)

2では、18世紀に幻想的な植物文として、ビザール様式と呼ばれる東方伝来の文様様式や、インド由来の更紗にみられる幻想的な植物文がみられたことを紹介しました。絵画としては、ジャン・フランソワ・ド・トロワの「モリエールの朗読」(1728年頃、個人蔵)やフランソワ・ユベール・ドルーエの「ポンパドール夫人」(1764年、ロンドン・ナショナル・ギャラリー所蔵)をあげて、それらにみられる幻想的な植物文を考察しました。ポンパドール夫人の肖像画では、フランス語でtoile peinte と呼ばれた手描きの更紗が描かれています。西洋の植物文の趣味のなかに、こうした幻想的な植物文の系譜が東方伝来のものとしてあることを示しました。女子美コレクションのなかにも、シノワズリー(中国趣味)と思われる面白い文様の資料がありますので、それについても、解説しました。

その後、特に写実の植物文について、フランソワ・ユベール・ドルーエ作「マダム・ソフィー・ド・フランス」(1762年)やジャン・バティスト・シャルパンティエとルイ・ミシェル・ヴァン・ローによる「パンティエール公爵とその家族」(1768年)を参考にしながら、解説しました。18世紀の後半に向かって、植物文は、次第に写実的に描かれた小さな花々がふんわりと散らされてる軽やかな文様になっていきます。上記のふたつの絵画でも愛らしい写実的な花模様が確認できます。こうした写実的な植物文が生まれた背景として、当時の植物図譜などの流行や、植物そのものの愛好があります。たとえば、フランス王家の人びとは、ヴェルサイユ宮殿の庭園にたくさんの季節の花々を植えて、季節を問わず、それらを愛でるという好みがありました。こうした当時の貴族階級の植物を育て愛でる文化の広がりについて知ることが、当時の写実的な植物文の理解には必要です。

当時の絹織物といえば、リヨンの絹織物(ブローケー

ド)が重要です。リヨンの絹織物産業は、17世紀から18世紀にかけて、革命の勃発に至るまで大変な発展を遂げていました。ヴェルサイユの宮廷では、宮廷衣装には基本的にリヨンの絹織物を用いなければならないという決まりになっていましたので、華やかな植物文の絹織物が宮廷の女性たちを彩っていました。

こうした写実的な植物文との関係で、すでに指摘されているのは、当時人気を博したボタニカル・アートとの結びつきです。植物図譜は植物学への学術的な関心はもとより、貴族たちの植物への深い関心を背景にして、発展してきました。たとえば、「バラの画家」としてよく知られるルドゥーテは、マリー・アントワネットのお気に入りでしたし、革命後にはナポレオン1世の妻のジョゼフィーヌに重用された植物図譜の代表的な画家でした。

そうした背景があって、リヨンの織物デザイナー(織物図案家)たちには、美しい植物文のデザインをするために、植物そのものを学ぶことが求められていました。彼らは、まさしく植物学として植物を構造の部分から深く学んでおり、さらに、植物を写生し、植物を微細なところまでよく観察し学んでいました。なかには、そうした植物画を得意とし、画家として活躍する者もいました。時代背景としても、ちょうど植物画が美術作品としてもてはやされ、一定の人気を得ていた時期とも重なります。講演では、特に、リヨンの織物デザイナーであったアントワヌ・ニコラ・ジュベール・ド・リベルドリー(1729-1790)が著した著作 *Le dessinateur, pour les fabriques d'étoffes d'or, d'argent et de soie* (1774年)に記されたことと、当時活躍した織物デザイナーでもあり植物画家でもあった、ジャン・フランソワ・ボニー(1754-1825)に着目して彼の仕事について紹介しました。18世紀の美しい植物文の背景には、花々を愛好する文化が広がっていました。

2024（令和6）年度 論文発表会の報告

2024年度の論文発表会は2025年2月22日（土）13時より、文化学園大学C101番教室で開催された。対面での開催となり、参加者は46名であった。

まず初めに玉田真紀会長のご挨拶で発表者へのエールが送られ、発表会の開会となった。発表内容は以下のプログラムの通りである。

<プログラム>

開会の挨拶 会長：玉田 真紀（尚絅学院大学）

卒業論文

座長：石上 美紀（文化学園大学）

1. オーノワ夫人の青の色彩観—妖精物語集における服飾描写を中心に

宮本 万帆里（お茶の水女子大学）

2. ゴッホが描くアルルの女と衣装

小林 蓮（文化学園大学）

座長：菅野 ももこ（杉野服飾大学）

3. 小袖裂の保存修復に関する研究—制作年代の判定・しわ伸ばしの数値化の試み・保存方法の提案—

小澤 舞依（共立女子大学）

座長：畑 久美子（愛国学園短期大学）

4. 画像生成AI技術のファッションへの応用—実物製作—

ZHANG HANGXING（文化学園大学）

5. 着物リメイクを活用したサステナブルファッションへのアプローチ—スタイリング提案—

中川 恭嘉（文化学園大学）

座長：須藤 良子（大妻女子大学）

6. 『平家物語』にみる白拍子の装いに関する一考察

新山 詠子（東京家政大学）

修士論文

座長：須藤 良子（大妻女子大学）

7. 日本における編子の導入と流通に関する研究

畑中 和花（共立女子大学大学院）

閉会の挨拶 副会長：伊藤 瑞香（和洋女子大学）

1件目はお茶の水女子大学の宮本万帆里さんによる「オーノワ夫人の青の色彩観—妖精物語集における服飾描写を中心に」である。17世紀末のフランスで出版

が流行した「妖精物語」の代表作家オーノワ夫人による『妖精物語』と『当世風の妖精』における青色の描写を分析し、オーノワ夫人の色彩観を明らかにすることを目的とした研究である。ほかにも資料として同時代の定期刊行物『メルキユール・ギャラン』や辞典を用いた考察がされ、オーノワ夫人は前時代から存続する道徳性や特権性といった象徴性に基づいて青色の服飾描写をしており、ロココ趣味の先取りとは異なるものであるという結論が示された。

2件目は文化学園大学の小林蓮さんによる「ゴッホが描くアルルの女と衣装」である。画家フィンセント・ファン・ゴッホが描いた複数の「アルルの女（ジヌー夫人）」に描かれた女性像と服飾について、ゴッホ自身の手紙等も用いつつ考察した研究である。一連の「アルルの女（ジヌー夫人）」は、ゴッホが日本的な美に憧れ、アルルの女性の自然な美しさを称賛した作品であると述べられ、加えてゴッホが療養していたサンレミ（Saint-Rémy-de-Provence）時代の作品には孤独や精神の不安定さが色彩や構図に反映されており、ゴッホの芸術の探索だけでなく、人生観や理想を投影した特別な作品であったと報告された。

3件目は共立女子大学の小澤舞依さんによる「小袖裂の保存修復に関する研究—制作年代の判定・しわ伸ばしの数値化の試み・保存方法の提案—」である。制作年代の判定では、裂に施された技法や模様、模様配置、生地、加飾によって、18世紀の中期から後期頃であると示された。また、染織文化財の保存修復の技術のひとつであるしわ伸ばし（加湿整形）については、修復技術者の経験によって感覚的に行われてきた処置を数値化することで、経験を積んでいなくても折り皺を伸ばすことができる方法について示され、加えて今



発表会の様子

回の加湿では目視で確認できるほどの汚れは落ちなかったことが報告された。そして本研究で扱った裂は、裏から補修裂をあて穴縫の技法によって補強する修復方法と、「平置き」と「巻く」保存方法が適切であるとの提案がされた。

4 件目は文化学園大学のZHANG HANGXING (チョウ コウシン) さんによる「画像生成AI技術のファッションへの応用—実物製作—」である。生成AI技術は近年飛躍的に発展しているが、なかでも画像生成AIのStable Diffusionをファッション分野への応用に適した活用方法を提案することを目的とした研究である。Stable Diffusionで異なるテキストプロンプトを入力することで、短時間で多様なデザイン案を創出できる可能性が示された。加えて、画像生成AIは服の縫製や構造に関する理解が不十分であるため、生成画像を参考に縫製知識と併せることで新たなデザインを創出することが可能であると報告された。また、同AIツールでイメージビジュアル制作を行い、AIモデルに着装させ、様々なアイテムと組み合わせたコーディネートを行えることや、背景変更や写真のスタイル変換を行うことで高品質なイメージビジュアルを作成できることが示された。

5 件目は文化学園大学の中川恭嘉さんによる「着物リメイクを活用したサステナブルファッションへのアプローチ—スタイリング提案—」である。サステナブルファッションに対する消費者意識がまだ低い現状を踏まえ、着物リメイクを活用したファッション提案を行うことで、その普及の可能性を探ることを目的とした研究である。リメイク技法やブランドの調査を行った結果をもとに、着物リメイクブランドのYOHEI OHNO"3711 PROJECT"第 2 弾 で 発 表 さ れ た Takarazuka shirt dressの衣服を用いて 4 種類のスタイリング提案を実施し、アンケート調査によってスタイリングの評価を行ったことが報告された。アンケート結果から、着物の雰囲気や崩すことやミックススタイルの新しさを融合することで着物への抵抗感を薄められ高い評価が得られたことと、実際に着用する意欲は着物の柄を活かしたシンプルなデザインの方が高かったことが述べられた。

6 件目は東京家政大学の新山詠子さんによる『『平家物語』にみる白拍子の装いに関する一考察』である。古い歌舞の一種である白拍子に関する研究におい

て重要な資料である『平家物語』諸本を調査し、白拍子の装いの変遷を検証した研究である。従来の研究では白拍子は水干を着たとされていたが、12冊の諸本を分析した結果、水干だけではなかったことが示された。また、鎌倉時代の男性服飾との比較から、白拍子の水干大口は男性服飾の模倣ではなく、不完全な男装という定説と一致したと述べられた。さらに、近世絵画にみられる『平家物語』の服飾描写と『平家物語』諸本を比較した結果、近世絵画にみられる白拍子祇王・仏を白拍子本来の服飾資料とすることは困難であるとの結論が示された。

7 件目の畑中和花さんは一身上の都合のため、やむを得ず欠席となった。

以上の発表は、服飾文化の多岐にわたる研究領域と研究方法、そしてそれらの成果を表すものであった。発表会の最後には、伊藤瑞香副会長のご挨拶で労いの言葉が送られ、閉会となった。

また、本発表会に際して、文化学園服飾博物館様のご厚意により、開催中の展覧会「あつまれ！ どうぶつの模様」を多数の発表会参加者が見学させていただきました。心よりお礼申し上げます。

情報交換会

論文発表会終了後、文化学園大学C201（スペース21）において、情報交換会が35名の参加で開催された。玉田真紀会長の乾杯のご発声で始まり、歓談とともに交流を深めた。次年度の大会が開催される共立女子大学の田中淑江理事より中締めのご挨拶をいただき、最後は伊藤瑞香副会長によるご挨拶をいただき、盛会のうちに散会となった。

最後に、今回学生たちに発表を促していただきました先生方、ご協力いただいた先生方に心よりお礼申し上げます。

(論文発表会担当 田邊しずか)



情報交換会、玉田真紀会長による乾杯のご発声

***** 会員よりお知らせ *****

●学生が開発したきもの運搬用バッグ2024年度グッドデザイン賞を受賞

大妻女子大学染色デザイン研究室（中川麻子担当）のゼミ生が開発・デザインした、きもの一式を快適に運べるきもの運搬用バッグ（商品名「シワになりにくい きものバッグ」）が、2024年度グッドデザイン賞を受賞しました。現在、高島屋オンラインストアで販売中です。

***** 事務局より *****

●会員異動（敬称略、申込順）

【新入会員】正会員 山川菜生（新潟青陵大学）中川浩一（倉敷芸術科学大学）【退会】青木美保子（新潟青陵大学短期大学部）

●年会費お支払いにはクレジット決済をご利用下さい（対象会員種別：正会員、海外会員、学生会員）

既に会報48号でお知らせしていますように令和7年度から学会費のお支払い方法にSMOOSY上でクレジットカードが利用できるようになります。領収証も即日発行されますので必要な方はクレジットカードでのお支払いをお勧め致します。（郵便振替の場合にはこれまで同様領収証発行に日数がかかりますのでご了承下さい。）

●会員登録システムSMOOSYをご確認ください

（対象会員種別：正会員、海外会員、学生会員）

当学会では会員皆様の連絡先、所属、年会費納入履歴等をSMOOSY上で管理しています。年度切替等で登録に変更のある方は速やかにSMOOSYより登録変更をお願い致します。特にメールアドレスが変わりますと学会からの大事な情報・ご連絡が届けできなくなりますのでご注意ください。SMOOSYのご確認・登録変更は、学会事務局からのメール下部に記載されているアドレス（下記）より、会員として登録しているメールアドレス、あるいは学会からの郵便物宛名に記されている会員番号でログインができます。（パスワード再設定もできます。）ご不明な点は事務局までお問合せ下さい。

会員登録システムSMOOSY

<https://fukubun.smoosy.atlas.jp/mypage/login>

◇◇◇◇ 服飾文化研究助成申請のご案内 ◇◇◇◇

学会設立25周年事業として、服飾文化研究の今後の発展に向けて、若手研究者への研究助成事業を開始しました。応募対象者は35歳以下（グループでの研究も含む）、服飾文化研究の基礎及び応用研究に寄与する研究で、研究助成期間は原則1年以内、1件の申請額は5万円以内。作品提案の研究も対象となります。研究期間中あるいは終了後に服飾文化学会大会または卒論発表会にて成果発表することが必要です。詳細は本学会HPの「若手研究者への研究助成応募要領」に記

載された内容と、服飾文化学会助成規定（pdf）を参照のこと。締切は2025年10月31日、審査結果は2026年3月31日までに本人宛に通知。応募申請書（word形式）はHPよりダウンロードし、服飾文化学会事務局まで書類提出してください。

◇◇◇◇◇ 展覧会のお知らせ ◇◇◇◇◇

■「どうしてなんだか似てる服」

会期：2025年4月3日（木）～6月21日（土）

会場：文化学園服飾博物館

開館時間：月～金：10：00～16：30（4/25、6/13は19：00まで）、土：10：00～15：00（4/19、5/31は16：30まで開館、入館は閉館30分前まで）

休館日：日曜、祝日、振替休日（4/6、5/25、6/15は15：00まで開館）

入館料：一般1,000円、学生500円、小学生以下無料
*障がい者とその付添者1名は無料

約30か国の服や染織品を選び、「かたちが似てる」、「もようが似てる」に分けて紹介する展覧会。

■「絵画×ファッション—春にめぐる装いの世界—」

会期：2025年4月21日（月）～6月21日（土）

会場：共立女子大学博物館

開館時間：平日10：00～17：00、土曜10：00～13：00（5/17は16：00まで開館）

休館日：日曜（5/18、6/15は16：00まで開館）、祝日（4/29は17：00まで開館）、5月7日

入館無料

銅版画を中心とする絵画資料と西洋服飾資料を合わせて展示し、18～20世紀の装いの世界をめぐる展覧会。

■「華麗にして繊細 友禅染の神髄 —丸紅コレクションの友禅染—」

会期：2025年8月5日（火）～9月25日（木）

（前期8/5～8/27、後期9/1～9/25）

会場：丸紅ギャラリー

開館時間：10：00～17：00（入館は閉館30分前まで）

休館日：日曜日、祝日および展示替え（8月28日、29日、30日）

入館料：一般500円

江戸時代の友禅染の名品を厳選し、さらに友禅染の技術の極みともいえる友禅染掛幅も一挙公開される。

会報 No.49：2025（令和7）年3月31日発行

編集発行人：服飾文化学会

事務局：141-8652 東京都品川区上大崎4-6-19

杉野服飾大学服飾文化学科西洋服飾史研究室内

TEL：03-6910-4422

E-mail：fukubunjim@gmail.com

URL：http://fukushoku-bunka-gakkai.jp/

（2025年5月、新ホームページに移行予定）